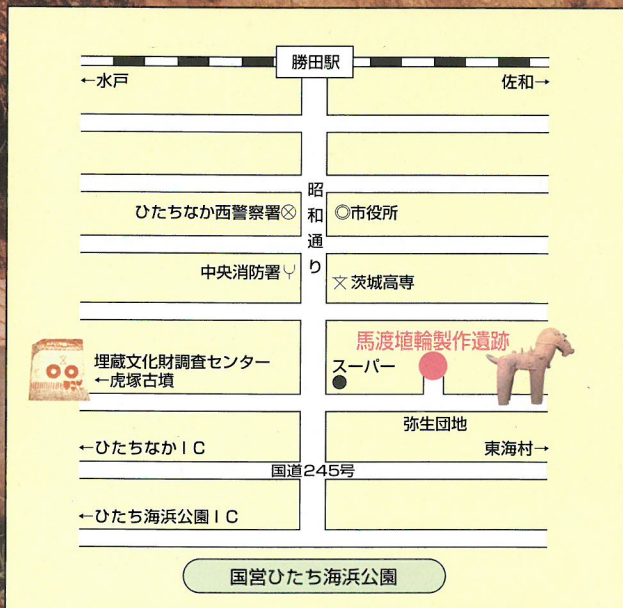


史 跡

馬渡埴輪製作遺跡

案内図



発掘当時の様子

ひたちなか市教育委員会



出土埴輪

概 略

馬渡埴輪製作遺跡は、5世紀の末から6世紀代の間、古墳に立てる埴輪を生産した遺跡です。

昭和38年、地元の中学生在がヤマユリの球根を掘っていて、馬形埴輪を発見しました。これがこの遺跡発見のきっかけです。

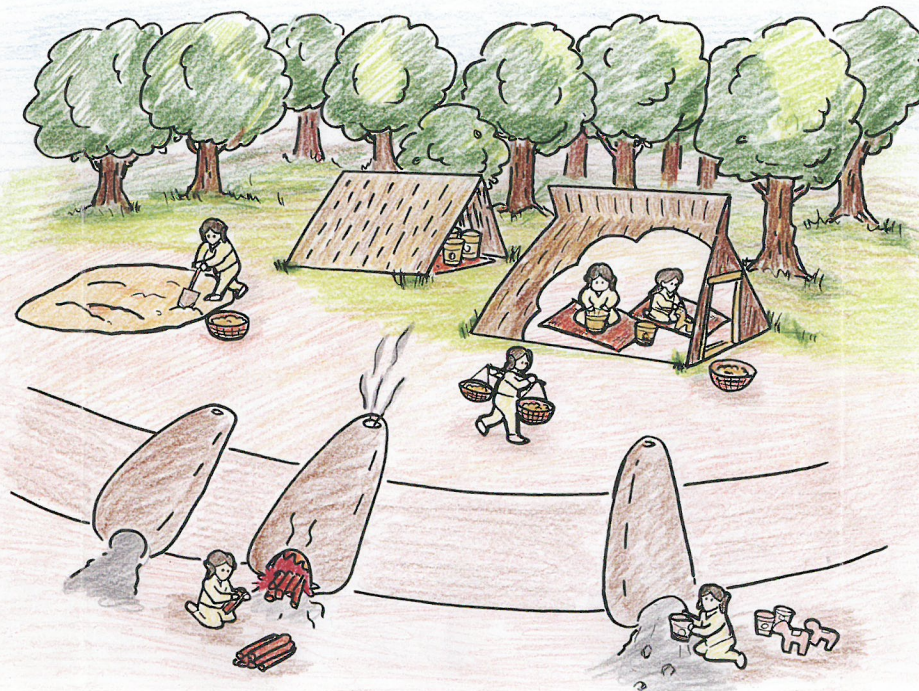
昭和40年から平成3年まで20回にもおよぶ発掘調査を行い、窯跡19基・住居址2基・工房跡（埴輪の成形をする作業場）12基・粘土採掘坑25箇所以上など、埴輪精算に関係した一連の遺構を発見しました。

原料の粘土採掘から形を作り焼あげるまでの一貫した遺構と工人たちの住居址がともに発見されたのはこの遺跡が最初のことです。

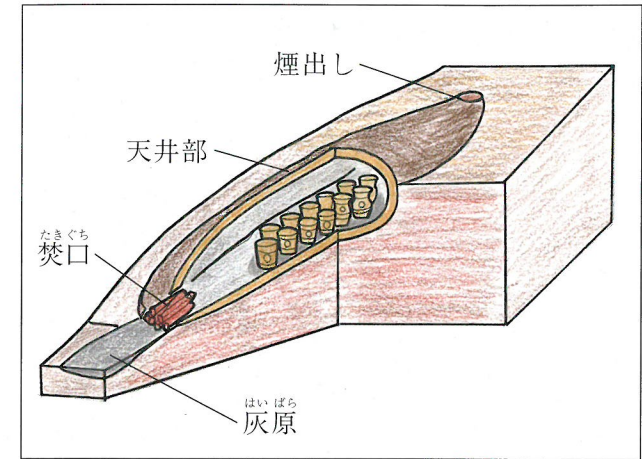
発見された埴輪は円筒埴輪や朝顔形埴輪・形象埴輪（人物・馬など）等があり、ひたちなか市内や周辺の古墳に供給されたと考えられます。遺構からは、工人たちの使用した土器や鉄器も見つっています。

馬渡埴輪製作遺跡は昭和44年8月に国の史跡指定を受け、現在は「馬渡はにわ公園」として整備し一般公開されています。その後の周辺部調査で遺跡がさらに広がっていることが分かり、南側一帯が昭和60年に追加指定を受けました。

当時のようす



半地下式登り窯断面図



馬渡埴輪製作遺跡の埴輪焼成のための窯は「半地下式登り窯」です。「半地下式登り窯」は、台地の傾斜面に窯の基礎となる溝を掘り込み、この上に木などの骨組みを作り、スサ（わらや草）入り粘土を貼り付けて天井部を設け、土をかぶせて作られていたと考えられます。

窯の低い方には火を燃やす焚口が、高い方には煙出しが設けられています。焚口から下方には、かき出した灰や不良品を捨てた灰原が続いています。

窯底・窯壁は強い火力で赤く固く焼きしまっており、埴輪の焼成温度は相当高かったことがわかります。